青年布教六字名號

かたみには
六字名号を
一のこしおく
あかつき
誰もあらじよ
蓮如上人

第　　號
第　　號
函　　架

緒言

世界の文明に向つて猛々進むのはよい。よいか、その文明が表面物質の一方に止まり、社會は實利主義に醇化して、爵位と勳章と財産の外、一物も眼に映ぜざる現時の青年には、吾人敢て「求法門」を說き、物質已外の一種の理想を有せしめねばならぬ。

時には道德論や人生論を談ぜも、唱へられぬのではない。ないか、その論議が、或は物質の文明に飽きたり、科學の錯雜に倦んだ結果より生じたのではあるまいかと思はるゝ。兎に角道德倫理は徒らに批評の俎上に弄ばるゝの今日だから。著者は此に「法度門」を說いて、眞摯に實踐法を教へざるを得ない。

蓋し、道德の基本は佛教である。が佛教の本義が道德とは云へぬ

三木文庫

佛教には世間俗諦の法を含有せぬではないが、それは偶然性であつて本質ではない、佛教本來の旨趣は、罪に穢れたる世界を去つて、樂み限りなき國に遊ぶ成佛の法なり。此に於て著者は「安心門」を說いて、他土得生の淨土教を示さゞるを得ぬ。

世間的現世主義を主張する宗教家は。「淨土教は此世界を稱して穢土となし、他方に淨土を欣へと教ゆ、之れ明かに厭世教である、厭世主義の世界觀は、社會の進步を妨げ國民の元氣を殂喪する公敵だから、速に社會外に放逐せよと叫ぶ。著者は、此迷想を匡さんが爲に、南無阿彌陀佛六字名號の眞意義を說くのである。

要するに本篇、六字名號の說明に、安心、報謝、求法、法度の四門を分ち、眞俗の兩面よりするものは、一に研究對象の六字名號、

意義多含なるに由るは無論なれど、抑亦それのみでない。近時、佛教界の言論、紛々擾々、或は歷史的研究と呼べば、或は組織的說明と云ふ、一方に批評的を叫けへば、一方に讚仰的を云ふ、殆んど適歸するところを知らずと雖も、ドレも極端の主義に過ぎない、極端に現世主義を排するもの、極端に未來主義を斥くるもの、共に著者か本稿を起すの動機であつた。ソーして他土得生を誤つて厭世觀なりと罵るもの、南無阿彌陀佛と聞いて、棺桶に足を投するかの如く忌はしき文字なりと思惟するもの、此等風癲者流の迷想を打破するも、著者か目的のその一である

時明治三十六年春

京都不明の旅窓に於て　憲雄識

青年布教

六字名號目次

第一席　「求法門」

青年の理想と六字名號

一種の迷想

所謂佛教文藝の薫化？

教育勅語と理想の標準

古今の通德

智德體

三德と名號

井伊公の逸話

第二席　「法度門」

道德の基本としての六字名號

先づ人となれ！

人と動物
他律的道德
眞宗主義の道德
心の主人
鞭鞭王の話

第三席「報謝門」

報恩業としての六字名號

一疑問
永劫の親
三業報恩
身業供養の心得
佛陀の行ひ
唱讃佛德
濟度衆生

第四席「安心門」

信仰の對象としての六字名號

信念の對象と安信
對象の分類
信念の必伴要件
對象としての名號
信念の成立
我祖の信仰告白
教機と信仰の根底
韓愚之と佛圖澄

青年布教

六字名號

野田憲雄著

第一席「求法門」

青年の理想と六字名號

一種の思想

昔の国家人間の勝者に、「米は不吉なるもの」と云ふ、一種奇態の思想を有つて居たソーです。ナゼかと申すにその理由はコーである。交通機械の出來てない昔、所謂寒村僻地にあつては、「江戸と脊中と米のなる木が見て死にたい」などゝ申したもので、米のとれないのみでなく、菓を見ることさへ、叶はぬ一つに數へた程であるから。

隨つて米の價も騰い爲に、滅多に米を食ふことはなく、常食は稗や粟ばかりである。僅に贅澤な人間が一生涯に唯一度、都合が宜くは米を食することが出來る、それは必死の大病の際、食は喉に通せぬとなつた頃、ヤッと張り込んで、一二合の米を購ひ、粥に炊いて喰ふと云はんよりは米を煎じて呑むと云ふが適切で、恰も近頃の牛乳と同しく米のソップを呑む杯は極めて贅澤な病人であつた。兎に角加様に、僅に死ぬる時、米の味の何たるを知る譯だから、米と云へは死ぬる、死ぬると云へは米と、コー聯想するところから、終に米を呼んで不吉と云ふに至つたのであります。諸君、之れは或漫錄に記してあつた奇談にして、僻地の不自由サを、極端に形容した滑稽話であるから、諸君は、一笑に附し去つて居られますが。私は。之

れを一笑に附し去る、諸君中、或は此奇談と一對の誤想を有て居られはせないかと疑ふのである、即ち青年の多數が、六字名號南無阿彌陀佛に對する觀念之れである。由來日本の青年が、六字名號を以て不吉の文字と思惟し、南無阿彌陀佛と聞いて忌はしきものと、曲解して居る傾きのあるは、或は一種奇態の邊より、生したる結果ではあるまいか。

誰やらが、佛教文藝だと評したゞけて、彼の淨瑠璃本などに、屢南無阿彌陀佛の文字が顯はされてあるが。「覺悟はよいか南無阿彌陀佛」などゝ、その多く殺さるゝ時、死ぬる時に、念佛が用ひてある死ぬる時は、御題目や陀羅尼より、南無阿彌陀佛が口調がよいが、ドーかは知らないが、必ず斬首や情死の場所には念佛の配合されて

ある奇怪である。此淨瑠璃的薫化を受けた譯ではあるまいが、多く世の中の人が、頭痛の藥として藥師佛を稱へ、戀地の使ひとして觀世音を祈り、貧乏だと云ふては、大黒サンに無心をならべ、サア死ぬと云ふ時に、彌陀の名を唱へる、平生は所謂雜行の稗や粟を食み死に瀕して念佛の米と、加樣に想ひ違へたところから、終に念佛は老人にのみ持て囃され血氣の青年には無用の長物と見做されたのであらう、何事も間違ばかりの世の中ではあれど、去りとて斯の如きのものは、西を東と間違へ、白を黑と取はづしたよりも尙、知れ切つた誤りである。私を以て云はしむれば、念佛は死ぬ時よりは生る、時に稱ふべく、病氣の時より健全の時に用ゆべく、晩よりは朝、老人よりは青年に信せさせたいのである。遠慮なく云へば、念佛を

信ぜざれば決して日本の人民でなく、六字名號を理想とせざれば、決して明治の青年ではないと申したいとのである。

諸君よ、念佛のことは且く措いたところで、由來人間なるものが惣ての動物より異る所以のものは、一種向上的思想、所謂理想なるものを有するにあることは、已に御承知てありませふ。ソーして此理想の標準とも申すべきものが、天皇陛下の教育勅語であることもこれも許さるゝであろう、無論陛下の教育勅語を遵守せぬ不忠漢なら、決して日本人民とは申されぬ、さてソコデ、南無阿彌陀佛六字名號の意義が、此御勅語に教へたまふところの意義と、一致されてあるから愉快である、請ふ先づ此に於て御勅語の本義より謹聽されたし。福澤先生の拜金主義は、金の一字を以て理想とした

古今の通德

のである。加藤弘之氏の巧利主義は、法律を以て、御勅語の眞髓と見たのであらふ、が私は、教育勅語に教へたまへる大旨は、孔門に所謂天下の達德たる、智仁勇の三德なりと申したいのである。畏くも御勅語に「智能を啓發し」「博愛衆に及ぼし」、「義勇公に報ずる」とのたまへるもの、即ちこれである、此の三つのものを、青年理想の標準とし、吾人の遵守すべき道義のモデルとするのである、ユーを去へば西洋流の人達は「智仁勇などは支那的舊式の道德で間に合はぬ」と云ふであらふ。先年も、畏き御勅語の改竄説を唱へた馬鹿者があつたが、恐らくユー云ふハイカラ黨から出たのであらふと思はるゝ、諸君、此三德は古今東西一貫の通德であるから、決して革むべからざることを記臆せよ。我國神代の歷史を繙いて見れば、建國の始め、天照皇太神が、皇孫瓊々杵命に對して、豐盧原の瑞穗の國は、我子孫、世々王たるの地である、汝ち往いて之を治めよと、御授けになつたのが彼の三種の神器である、此三種の神器が三德の標示にして、鏡は照了の智、玉は温良の仁、劍は果決の勇でありますから、國民上下一般に遵守すべき人倫の標的は、昔も今も變らぬのである。次に支那道德の儒門に於ても、其教は種々あれど、五倫の間に通して行ふべきものは、智仁勇の三のものは、天下の達德なりと申してある。又印度哲學とも稱すべき佛教には、つねに智斷恩の三德と申して居る、即ち無限絶對の御佛が、平等の智惠を發して、一切法を明らめたまふことを智德と稱し、一切衆生の罪惡を斷盡したまふ勇氣を斷德と云ひ、大慈悲

心を起して衆生を救濟する、仁慈のことを恩德と申します。此外、西洋的の語を用ゆれば、智德體の三と云ひ、哲學趣味の語を借れば眞善美の三と云ふ。兎に角、三德は古今の通德、東西一貫の教であると云ふも、敢て言ひ過ぎでもない。

凡そ、社會國家の原素は個人である、個人の利益幸福は、取りもなほさず國家社會の利益幸福となるのであるから、幸福なる國家社會を建設せんとならば、先づ自己の幸福利益を謀らねばならぬ、自己の利益幸福を謀らんとするには、須らく先づ、身體を健全にせねばならぬ、イッモ青菜の稠れた如く、シホシホとして、枕邊に藥瓶を侍らすと云ふ分野では、勞働することも出來ず、學藝を修むることも出來ぬ、隨つて國家社會の進歩改良を企つることも、その安

寧幸福を圖る事も、生存獨立を保つことも皆叶はぬのである。故に吾人第一の務としては、衛生を重んじ、運動を怠らず、身體を強壯にし、英氣を養ひ義勇公に報せねばならぬ。次に吾人の求めざるべからざるものは智識の啓發にして、西諺にも「智識は勢力なり」と云ふてある、イクラ體力が強くても、人間が馬鹿では、獨活の大木用をなさぬ、歐州各國が今日の文明を致せし所以の者は、全く智識の力に由ると云ふべきである。次に切要なるは道德にして、道德は萬事萬行の基本なり、吾人若し道德を養成せざれば、ヨシや幾萬の書冊を讀むも、イカ程智識を有するも、亦何等の益に立たぬのである智體德の三完備して始めて一身の利益も得られ、一國一社會の幸福も享けらるゝのである。

トコロで此三、完備することが甚だ以て難いものと見なして、昔し彼の希臘が智の國で、埃及が德の國であつた如く、我國の歷史上でも、時代によりて異りてある、太古蒙昧の頃は、無爲にして化する德の時代で、中古王政武門に移つてより、勇の一片に傾いたのである、德川時代文弱に流れた頃は、智に偏重したものと云ふてもよからふ。サテ今日明治の精神としては、明治天皇の御勅語を理想とし智仁勇の三完備せねばなりませぬ。この三、完備したまへるものが即ち佛陀である。世人ヤ、もすれば、釋迦だとか、佛だとかと聞けば、直に抹香臭いものと思はるゝのだが、ソーでない、此智仁勇、完備したものが佛にして、彌陀の両脇に在る觀音と勢至は慈悲と智惠との二つであつて、釋迦に隨ふ普賢文殊も矢張それである。サテ

眞宗で教ゆる阿彌陀如來も、矢張りそれであることも述べて見ようと思ふ

超世無上に攝取し　選擇五刧思惟して
光明壽命の誓願を　大悲の本としたまへり

とは、吾大師が小經金口の說によりて、和讃に謠ひたまへる御言である、光明とは智惠の變稱、壽命とは勇のこと、智と勇との二を、大悲の本體と爲す、大悲とは仁慈道德の異名である、彌陀は大慈悲の結合體にして、攝化の大本としては智惠と壽命の二を有す、豈に夫れ目出度きことの極ならずや。人格上の彌陀(佛體)已に斯の如くなれば、六字の名號(佛名)亦此三德に外ならぬのである。コレに就いて諸君も知らるゝ彼の幕政の大老、井伊直弼公に、阿彌陀釜の逸話と云ふ事があります。阿彌陀釜とは、阿彌陀の三字が刻してある

釜で、井伊家唯一の名器なるが、篤て佛教信者の井伊公のこと迚、
或年の元日、此釜を掛けて、新年を祝ふて居れし處、或一人の家臣
之れを脉め、「イッは兎も角今日は元日の事、阿彌陀釜を御用ひあるは不吉のやう心得ます、乍恐君には、今日丈御止まりあつて然るへくと存します」と諫めたとき、井伊公笑つて、「サテ〳〵學問のないものは馬鹿なことを申すものかな、此阿彌陀釜は日本一の目出度品で不吉なものでは決してない、其譯しるまい語つて聞さん。ソモ阿彌陀とは天竺の梵音で、之れを漢文に改むれば、歸命無量壽覺となる、歸命とは命令に隨ふ事にして、君命に從へば忠、親に從へば孝、即ち忠孝道德の異名なるぞよ、無量壽とは限りなき命數にして勇氣のこと、覺とは智惠の替名、ユヽ云ふ結構の御謂れぞ、南無阿彌陀

佛に含まれてあるから、目出度元日に阿彌陀釜を掛け、現當二世の幸福を、思ひ浮べて樂しむのである」と、ねんごろにさとされたれば、例の家臣も大ひに感じ、終に佛教信者となつたとあります、諸君よ念佛は死ぬるときより生るゝ時に稱ふべきもの、老人よりも青年の信ずへきものと申しましたは即ちこゝである。世に目出度ひ時には、萬歳と申しますが、萬歳と申すかはりに南無阿彌陀佛と稱へて貰いたい、萬歳とは萬年の壽命であるから、目出度いに違ひはないが萬年と云ふ限りがあります、南無阿彌陀佛は無量壽であります、コレ決して私の牽强附會の獨斷說でない、かの祖師上人が、「朝家の御ため國民のために、念佛まふしあはせたまいさふらはゞ、めてたふさふらふべし」。とのたまひしものは即ち此意味にて。我祖師

は朝家の萬歳を唱へ、國民萬歳を呼ぶ替りに、南無阿彌陀佛を稱へたまふた人である、かの蓮如上人が正月元日、勸修寺村の道德に對して、イキなり、「道德イクッになるぞ道德念佛申さるべし」との御言葉は、元日年首の祝詞であつたので見れば、矢張蓮如上人も元日の萬歳を祝するに念佛を稱へたまひしものであります。

第二席「法度門」

道德の基本としての六字名號

私が、過日或る漁村に於て布教を致しました際に。漁夫の一人が出て參つて「モシ御使僧サン、未來人間に生るゝ確かな近道はありますまいかね、私共は物の生命をとる殺生と云ふ殘間しい仕事が稼職だから、未來佛に成らふなんてことは、迚も出來るものでないと信して居る、またコンナ者が鐵面皮に佛にならふと望むのがテンで間違つた心得かと思ひますから、來世人間に生るゝ道があつたら教へて下さい」と、加樣に申しました。ソコデ私が「ソリヤ御前さんは感心なことだ、人間に再び生れたいと云ふは至極結構な望みだが

併しトーです、同し人間にならふと云ふのならば、死んで未來の人間になるより、生きたこの世で、人間となる教へを聞てはドーシヤ」と申してソレから道德の談話を始めたことがある。本日來會の諸君にも死んだ後に佛になるよりは、生きた此世で人間となるの望みを有てもらいたい、斯く申せは諸君中、「我等は固有の人間であるから今更めて人間となるの必要はない」と力味るゝであろふが。イカにも形體上からは御最なれど、私の所謂人間とは、形體や名稱と云ふのではない、眞の人間精神上の人間となれと申すのである。「由來人間が萬物の靈長なりと僑り來つて居るのは、決して名稱や形體の上から言ひ得べきものでなからふ、形の上より云へば、動物より劣る個所が澤山あるではないか。見よ齒はあれとも動物の牙より弱ひ

爪はあれとも猛獸の爪より脆い、人間の足は馬の健脚には及ばす、人間の手は鳥の羽翼に劣るであらふ、去れば形體上、四肢五管、何れも人間の長所である。或人は言を發し、語を解する處が人間の長所だと申しますが、私に言はしむれは、人は言語を發するから、不自由極まる、動物は言語がないから寧ろ便利がよい。御覽なさい英國の語は日本に通せず、佛蘭西語を學んでも獨逸人と會話は出來まい、狹き日本の内にあつても、九州のバッテン語は奥州のダンベイに解らぬでないか、之れに反し彼の動物はドーである、日本種の犬がワンと吠ゆれば、西洋産の犬もワンと泣き、歐州の猫がニヤーなれは、亞細亞の猫もニヤーである、西洋でも日本でも雀は、チユ〳〵鳥はカア〳〵、何と諸君これ程通用のよい便利なことはあり

ますまい。ゴノ動物の單純に比して見れば、人間には復雜なる手仁於葉や、アクセントがある爲にドレ程不自由かも知れない。

又或詭辯家の説に、「人間は火を利用することを知つて居から動物より勝る」と申しました。ナル程、動物の火を使ふことを知らざるに反し、人間は火を應用して種々文明の機械を調へて居る、汽車、汽船を始め、電信、電話、電車、電燈、寫眞、活動寫眞、X光線に至る迄、皆火を應用して造られたもので、火には光と熱との用きがある、之れをつかい分けることを知つて居るが、人間の長所だと申しました、是れは「思慮多きが故に人と名く」と云ふ、俱舍論の説と同一であるが、その云い回しかたが一寸斬新で面白い。兎に角、之れも一の理窟であるが、併し、私は人間が萬物の靈長たる所以一

つや二つでは無からふが、其根本的差異は道德を行ふと否とにありと申したいのである。道德とは、まことの道のことで、臣としては君に忠を盡し、子としては親に孝を行ふ、兄弟朋友の間より、國家社會に至るまで、誠を以つて交るが、人間たるの道である、彼の行誠上人が

はりつたぶ鼠のみちもみちなれど
まことのみちぞ人の行くみち

と申された如く、道もいろ〳〵あれど、人間たるの所以は忠孝倫理のまことの道を行ふにある。此道德の行へぬ者ならは決して人間とは申されませぬ。

併しこれくらいのことは、私が多くを申さなくても、諸君は已に

御承知てせふ、人間は道德が肝要だと云ふことだけは、誰でも知つて居ることだが、知りながら行はなければ、三文の價もないから、ドー致したならば、行へるのであらうかと云ふ、實踐の近道を御話するのが、本題の大旨である。これを教ゆるに就ては、或は自愛主義だとか、或は他愛主義だとか、又は自他兼愛だとか、種々の學說もある事ですが、眞宗で教ゆる道德はツー云ふ六ケしい理窟のある教へ方ではなく、極單純な、極理窟を離れた道德である、「全體道德は理窟で說いたぐらいや、教へて勸めた位では、出來るものでない。論より證據、學校生徒を御覽なさい、教員が生徒に對し、頻りに忠孝を勸め、道德を說いて聞かせて居れども、中々道德を行ふ生徒がないではないか、過日の新聞に、某小學校の教員が生徒に向ひ「教員さは如何なるものなりや」と質問をした事が出してあつた、それに對して生徒の一人が、「教員とは人にてつくり、物を教ゆる機械なり」と答へたと書いてありましたが、諸君面白いではありせぬか、巧みに教員を罵つたのである、教員サンも猫や犬でない、人間でとしらへてある、ソーシテ忠義をせよ孝行せよと教へて呉れる、教への機械だ、教への道具だといふことです、固より小兒は天眞無邪氣である、コ、一番先生の惡口云てやらふとて書いたものではあるまいが現今教育家中に所謂機械的の教師もある、破廉耻極まる先生もないではないから。天、兒童の口をかつて、教育家を罵つたのであらふと思ひ、深く悲んだ次第であります。斯くの如く忠孝道德は、人から教へられたり、勸められたぐらいシャナカ〳〵出來ない。行へな

いばかりではなく寧ろ教ゆる人の惡口を云ふて居る分野であります
から益に立たない。

然らばドーシたら行へるかと申すに、此に於て、所謂眞宗主義の
道德の基本を御話しせねばならぬ。蓮如上人の御歌に

今はは や六字の御名にまろめられ
我まゝならぬことのうれしさ

とあります、此歌はイ、ロ〳〵の解釋も出來ませぬが。私は、此歌が
眞宗道德の根底を教へたまへるものと拜見したい。歌は吾まゝせぬ
と云ふだけの、消極的に作られてあれど、積極的に云へば、忠孝道
德の行へるのは、六字名號を中心とし南無阿彌陀佛にまろめらるゝ
によつて出來ると云ふことになります强て語を設くれば、自覺的信

念より迸つたる道德、自律主義の倫理を教へ玉ふのである。
自律主義だとか自覺的だとか申したのみでは御了解にならぬ諸君
があるかも知れない、平易に云へば六字名號を以つて吾人が心の主
人とせよと云ふのである、心の主と云たのみでは未だ分るまい。私
が、小供の時分、コー云事がありました。誰れでも小兒の頃は、桃太
郎やカチ〳〵山の昔話は好きなものだが、特に私はアヽ云ふ御伽話
が好きであつた爲に、毎晩、父親にねだり附いて聞かせて貰ふたの
である。就中加藤清正の一代記などは、御曼頭や御菓子などより、
好きであつたから、度々清正の昔を聞く、その間に、イッシカ自分
が、清正を心の主人としたのである。已れは何でも清正ほどの大將
になりて見たい、一度は朝鮮迄往つて虎をなぐり殺して見たい」と

常に清正のことが忘れられない、終には已は大將だ、清正たと云ふ氣質になりて仕廻いました、サアコーなると、隨分亂暴をする、友達をなぐり倒す、妹共を泣かする、隨分親も困たのてあらふが、又其一つの取得としては、決して泣くなどの事はなかつた、ドンナ悲むべき事がありても、涙ぐむ位の事はあつたが、チ、〳〵と聲を放つて泣いた事は一度もない、これ何故なれは、清正だから泣かないので、泣かぬは私し、泣せて呉れぬは心の主人、加藤清正の賜である、今から考へ見れはッマラヌ御話で、僅に私は清正ぐらいを心の主人としたが爲に、泣かぬ位の事が、取得であつたが、若し小兒の時、小楠公だとか、曾我兄弟だとかの話を聞いて、をけは、小供乍ら忠孝が行なへたのであらふと、今では後悔して居る、近頃所有小

學校に修身の二科が設けられたのは、コー云ふ必要から起つたのであらふ。夫から私が、支那の李鴻章を心の主人としたことがある、ナゼと云ふに李鴻章は東洋第一の金滿家で、而も名譽は世界中に耀いて居た、ナポレオンやビスマクーは知らぬものもあれど、李鴻章の名は田舍の老婆共でも知て居る、名譽も財産も、東洋唯一で、先づ近來の英雄である、同じ人間と生れは程ならは、僕も李鴻章迄にはなりたいと考へた、此時は李氏が心の主人であつたと云ふてもよからふ。それから私が、今に於て忘れもせぬ、思い出す度毎に、慄然とする程恐しき出來事が、明治二十四年十月二十八日の朝です、僅時間ならば三分間内に、數千人を壓殺した、彼の尾濃三三ケ國の大震災の時である、私の鄕里尾張の如きは、數百の寺院輪奐廣壯の

般遊人の數歩を辛かれ、小供の時よりの友達は、死んだ者が數人れす、目の當られぬ惨狀であつた。ソシテ時とそ、衷心此世の無常を感ぜたのである。アヽ、無上迅速生死事大、有爲轉變の世の中かなと、氣が附たのが動機となつて、私は御佛に近いたのである。それが因緣となりて私は、南無阿彌陀佛を心の主人に宿したのである。諸君は加藤清正、支那の李鴻章、元と人間であるから、心の主人とすべき慣習はないが、盡十方无量の、暖かき光りの内に攝められ、御佛を主人として御覽なさい、茲に始めて、凡夫の卑しき劣情は、薄らぎ一種尊とき同情の念は、油然として涌き出すから愉快である時には凡夫の弱點として、御耻かしき情欲の雲の起らぬで無いが、起る其手から「アヽ我れは御佛の子である、我れは光明中の人であ

ると自覺して、漸く感情に打勝つのであります。此精神が君に向へば忠となり、親に對すれば孝となるの故、倫常道德の根本基礎は、自覺的信念六字の御名にあるめらるるから、出來るのであります。

これに付て、古き讀本に記されたる、蓮鞋王の昔話を照會して結論に代へませう、昔蓮鞋の國の大王が、或日、百官百僚を從へ、或る處へ行幸あらせられました際、其道すがら、突然一人の出家が現はれ、大王の馬前に跪き、「恐れながら大王に申上ます、私唯今、大王に對し、千金に替へられぬ大切な言を申し上げたいと存じます、夫れに就ては其價として、我に百金を與へ玉へ」と申ました。供奉の人々コレ聞いて、何でも發狂坊主に違ひない、不禮極まる申分哉、追逐はんとなさいました。豫て賢明なる蓮鞋王の事迹、之

を鋤し「マテ〳〵之れには何か子細あるに相違ない、宜しい百金ヤロー、一段ふて聞せよ」との御敕諚であります、そのとき唯今の御出家、百金の代りとして左の言を申上た。(諸君、此言は、璡靼王が百圓で買ひ取り玉ふたのでありますから、私が只申上るのは實に惜ひのであるのだが、本日は御土産として、只差上ます、其替り途中遺失せぬ樣、宅迄御持參になりて御披露を願ます即ち「其終を熟慮するに非ずんば事を始むる勿れ」、末の考へをせぬ内は、事は始むるものでないと云ふ、誠めの一語である、諸君之れだけが百圓であるが果して諸君は、百圓の價値があると思へるかどうである、供奉の面々は、そんな言は知れ切りた事で、百圓どころか一文の價値もないと、輕々しく聞き流されたとおりますが、璡靼王唯御一人は深く御感心あそばして、夫から御還幸の後、直に御殿の、家財道具に、此語を刻し附て御置になつたさある、ヨコハが物は用ひ方に由つて價値の出るもので、時は數十年の後、始めて其一言が百圓の光を放つたから面白い、と申すは、數十年の後、臣下の一人に反逆を企てた者があつ、密かに毒藥を以て茶に混し、大王に差上げんと、茶碗を取り出した、其時に圖らず眼に映じたのは、茶碗に刻してある例の言にて、「其終を熟慮するに非ずんは事を始むる勿れ」とありと書てある、「マテよ已れが今毒を差上ぐれは、大王は御崩御なさる、誰が茶を差上けたと調べられたら、我れと云ふ事は直知れる、終には死刑の宣告を受けて、絞首臺上の露とさゆる、成程、末を慮れは此事は出來ぬのであるか、加樣に氣が附たら、覺へず顏色青ざめ、慄

然と震ひ出したのである、大王御承知がないから、「如何した」と御下問になる、包まず隠さず懺悔すれば、大王一度は驚き一度は喜び「數十年前百金で買上げ置いた一書が、今こそ示ヲを顯はしたのである、命に替はる寶はないぞ」と仰せられたとあります。

諸君よ、此話を申上げたのは他でないので、瑾靼王が百金の御言は、家器に刻してあつた爲めに、危き一命を拾はせられし如く、本日來會の諸君も、此話を聞くと共に、今日より南無阿彌陀佛の名號を、身體髮膚に刻り附けて置ひて御覽なさいと申すのてある、刻すると云へば、文墨でもするのかと云ふ、早合點の人もあらふが、左樣でない、言を替へて云へば、六字名號を體中、忘れぬ樣に持つて置けと申すのてある、口に念佛の刻してある證據には、例へは一朝

の忍りて來し、人を罵らんとしたその時、「マテ〳〵」此口は常の口れ非す、念佛を稱へる口である、六字の刻つてある口である」と自覺するから、終に罵ることを止めるのである、腕に名號の刻つてある證據には人の頭をなぐらんとして、腕差上たその下から「忍べ〳〵此腕は佛を拜む腕である、名號の刻つてある腕である」と、氣が附て終には人を歐打することも止まるのてある、其他身體髮膚、頭の天邊より、足の爪先迄、六字名號でまろめて置けは、決して我儘は止まり、麗しき人間道德は行へるのてある、要するに、眞宗主義の道德の基本は、六字の名號を中心とするにあるのです、諸君よ六字名號を中心とせされは、決して完全なる道德は實行せられぬ者なりと記憶せよ。

第三席　「報　謝　門」

報恩業としての六字名號

「信の後の稱名念佛は、如來我性生を定めたまへる御恩報謝の爲めとは。眞宗僧侶の常に口にするところでありて、信徒諸士の平素耳にする慣用語だから、隨つて此言について何等の疑問も起るまい。然るに、コレを門外の青年諸子に聞かせたならば、定めて怪まるゝこと疑ひあらふ、イカにも念佛を口にしたくらいで、佛陀に對する報謝の義務が濟むなどゝは、承諾の出來兼ねる譯である、見易き例を擧くれば、權兵衛なる人より恩を受けて、その御禮として、酒料なり、菓子箱なり、品物を贈れば權兵衛は滿足すれど、唯口頭で權兵

衛さん〳〵と呼ひ連けたくらいでは決して報恩とはならぬ如く、我等が永劫の苦悶と罪惡とを救ひたまへる、大悲の御親に對し、唯その御名を呼んで、南無阿彌陀佛と唱へたのみのことが、ナセ報謝となるか？、之れを通俗的に辯明するのが、本題の大旨であります。

南無阿彌陀佛の名號、その數僅に六字のみ、是れを稱ふれはとて其間何等の神秘作用のあるとも見へぬ、若し單に物理的眼光を以て見れは、全體口に名を呼ぶと云ふことは、一種聲帶上の波動が、空氣の震動を起して、自身の鼓膜を刺激するに過きない、殆んと松吹く風のそれと同しく無意味なもので、それが報謝になるなどゝはイカにも思はれない。併ら之れを「聲は心意の響なり」「言語は思想の車なり」てふ、原理に基いて、心理的方面より解釋すれは、名を唱へ

名を呼ふと云ふことは至つて美妙な趣味のあるもので。「御母さん」チウ幼兒の呼び聲、聲その物は固より聲帶の震動に過きない、母已外の人の耳には、單に皷膜を打つに過きない、去れど「御母さん」と呼んだ子の意、之れを聞いた親の感情を調べて見れは、無量の難有味が含まれてある、つねに親を慕へる幼兒が、安慰と滿足の熱情より迸つた呼び聲だから、聲に觸れたる親の、激動は狂せんはかり歡喜と滿足の間に之れを迎へるであらふ、「今もそれと同しく、佛陀に對する我等の態度が、他人行儀の間なら名を唱へ、聲に顯はした念佛くらいで、報謝になるへき筈はないが、祖師聖人が和讃に

子の母をとをもうことくにて
衆生佛を憶すれは

現前當來とほからす
如來を拜見うたがはす

とのたまへる如く、彌陀は我等の永劫の御親であつて見れは、決して他人行儀の御禮などは受けたまはぬのである、決して香華燈明等の供養を喜ひたまはぬのであるが、唯歡喜敬虔の赤心より捧げたる、南無阿彌陀佛の念佛こそ、佛は滿足して報謝に受けたまふのであります。

然らは、佛は聲の御禮の外は、何物も受けたまはぬかと申すにソーでない、廣く報恩の義を論すれは、凡そ三種の方法があるので。

一、意に信心を得る　　意業
一、口に念佛を唱ふ　　口業

身業供養の心得

一、身に供養を行ふ

身業

即ち口に稱へる念佛のみでない、意に信心を得るも、身に供養を行ふも、悉く報恩である、先づ信心を得れば佛の意を安んし奉るのであるから、自然報恩になる、之れを蓮如上人が

吾往生は治定と思ひさためてのちは、信行ともに報恩謝德の爲と

こゝろうへし

と仰せられてある、又香花燈明を捧げて身に供養を行ふも報謝である、身口意三業みな報謝なれとも、中に於て主伴を論ずれは念佛が主なるものである、此に於て蓮如上人の御語を抄錄して、身業供養の心得を申して置かふ。

「佛前に燈をかゝけ、花をさゝげ、香をたきて、報謝を營むは、み

な如來より我等への催促をくだしたまふなと信すへき事」

「御前に花をたつることとは。はやきりたれは命はきれたる草木の花なれとも、僅なる水に養はれて、生木のことくなるは、我等が生は死の始めなれば、生のはしめよりはや死のかずに入れとも、無常の使きたらぬ間、なをらへたる骸をもへとの催促なり、此故に一流には、他宗にはりて佛前に、あをき草木をきりたつると知るべし」

「香をたくことは、香のあるあいだは、火のもゆれば煙たつなり、香つきて火きへぬれば、そのまゝ火たへて灰となる、この地水火風のかりなるものゝ口より、息いつるは、かの煙のことく火たゆれば灰となるは、我等が一心の火きへて、鳥邊野の薪となりて、

ひへたる灰となるによそへて、見るべしとの事なりと知るべし」

「御燈明をともす事、その燈のあるあいだは、明かにしていつまでもありぬべきやうに思へども、風吹きぬれば忽ちにきゆるなり、我等が両眼も一心の火のあるあひだは、明かなれども、無常の風いまに吹來たらば、両の眼たちまちとづるによそへて、みるべしとの事なりと知るべし」

「御鉢をそなふることは、我等が命はこの飯米の恩なり、これを以て命をやしない、かゝる妙なる佛法を聽聞まうす、その嬉しさをよろこびて、そなへたてまつるなりと知るべし」

「親の命日御鉢をそなふるは、親へは報恩なり、父母の恩德にて人界の生をうけて、かゝる目出度き佛法を聽聞まふすこと、忝なさ

の報謝のためなりと心得べし」

以上の御語、要するに佛に香花燈明を供養するは、權兵衛に菓子箱を贈るとは同しからず、唯佛法を喜ひ念佛稱へる助緣とせよとの御指導であります

全體、この世の中に於ても、他人と他人との間に於ては贈物をせねば、感謝の意を表することは出來ないが。親に孝を行ふとも、親の恩を報するについては、品物を以て喜ばするよりも、心を以て仕へるが第一でありませふ。昔し二十四孝傳の孟宗が、親に竹の子を食はしたが孝行であつたからと云ふて、態と齒のない老母に堅い筍をすゝめて困らせた不孝者もあつたと聞きましたが、筍を喰はすはかりが孝行でない、親の意に契ふと云ふが第一の孝行であります。

夫れと同様、今我々が佛陀の恩を報するには、第一御佛の意に契ふ行ひをせねばならぬ、「意に契ふ」と云ふことが報恩の第一である。佛の意に契ふは、佛陀の行ひを我行ひとするより外はありませぬ。

トニロで佛陀の行ひとは、ドンなものであるかと云ふに、自利と利他との二つであつて、即ち自分も佛となり人をして佛たらしむると云ふに結歸するのである。これは多くを申さなくても、佛陀と云ふ名稱と、佛陀の御姿とを見れば直に知れるので、佛陀の梵音を漢字に譯すれば覺となる、覺とは自覺覺他覺行窮滿の義で、自他共に、さとると云ふ意義である。阿彌陀佛の御姿が、右手を上げたまへるは上求菩提の自利にして、左手を下げたまへるが下化衆生の利他である、兎も角、佛は自利、他の二つを行ひとしたまふのであるから

我々も此二つを行へば、佛陀の意にかなふのである。サテそこで、南無阿彌陀佛の念佛が自然此法則に契つてあるから愉快です、請ふ之れを說かしめよ

一念佛は讚歎佛德の自利を意味す

一念佛は濟度衆生の利他を意味す

六字名號を稱ふれば、自然佛德をほむることゝなり、一切衆生を濟度することゝなるから、念佛が報恩に相成ると申すのであります。

這は唯私一個の愚考でなく、實に祖師大師の指導に出でたもので、即ち「和讚」に

佛慧功德をほめしめて
十方の有緣にきかしめん

信心すでに得んひとは
つねに佛恩報ずべし

とあるは、此意に外ならぬのである、佛慧功德をほめるとは佛德贊歎の自利、十方の有緣にきかしめんとは衆生濟度の利他、この二つの理由あるを以て佛恩報謝には念佛を勸めたまふのである

惣べて何事でも、愉快の極度に達し面白い頂上に立ち到れば、言語も理窟も出ないものと見へて、彼の俳句の名士であつた芭蕉が、東北へ旅行したる際、ユー云ふ話がある。陸前の松島は日本三景の隨一であつて、音に聞へた名所だから、芭蕉翁、ナンでも此絶景を探つて特色の發句を吟せんものと、勢ひ立て、見物に往かれしに、サテドレも風色の結構さ、聞きしに勝さる分野にて、流石の翁も美

感に打たれて、何と云ふべき言の葉も出ない。そこで唯両手を打て「松島やア、松島やゝ〳〵」と吟したとある、トコロで此句が余程の名吟で、松島の名を呼んだは松島の美觀を歌いつくした翁の翁たる所以だソーです。古歌に「まいびとのすぐるゝわざに言たへてほむるあまりに名をぞよびける」とありまして、德をほむるには名を呼ふに如くはない、水戸の光國が、湊川楠公の碑銘に「嗚、呼忠臣楠氏之墓」と刻したが、我國忠臣の代票者とも申すべき楠公の德、如何に千百の文字を連ねた頌德文を以てしても、讃めつくし難ひのである。光國が僅に碑銘に楠氏の文字をあらはし、八字を以つて、楠公一代の德を、頌し盡したのである。すべてその物の名を呼べは、德をほむるとゝになる御佛の德をほむるもヤハリそれと同しく、名

を稱へるに如くはない、實を云へば澄墓な我々風情が、高き佛德を
ほむることは出來得らるべき譯でない。大經には、大聖釋尊が、四
無碍八音の雄辨にし、晝夜一切常に讚嘆しても、ほめつくされない
のは、彌陀の佛德と記されてある、小經には、六方世界の諸佛ひと
しく口をそろへて、彌陀の佛德をほむるに、不思議の言を以てして
ある。斯の如くに道理や文字を以ては、ほめ難き佛德なれども、我
等は單に口に佛の御名を稱へ、南無阿彌陀佛と呼び奉れば、唯それ
のみで、廣大の佛德が讃めらるると云ふ、一種不可思議の力により
て佛恩を報ずるのであります。

モー一つの理由は、念佛を稱ふれば自然人を佛教へ誘導する妙用
がある、所謂衆生濟度が出來ます、から佛恩に相成るので、即ち祖師

聖人が

無慚無愧のこの身にて
まことのこころは無けれども
彌陀回向の法なれば
功德は十方にみちたまふ

と示された如く、念佛稱へるは卑しく汚れたる凡夫の口だから、利
益のあるべき筈はない、口にねうちは無けれども、稱へられたまふ
御名が、御佛より御回向の清き尊とき法であるから、念佛すれば十
方世界に功德が充ちて、云何なる者でも終に佛法に入ることになり
ます蓮如上人は

「聖教よみの佛法を申したてたることはなく候尼入道の嬉しや尊と

やと申すを見ては人信をとる」

と仰せられましたが、實に味ふべきは此一言である、早く云へば、學者の百千の演說を聞いたのよりは、無智の媼翁が唱へた念佛の一聲を聞いたのが、寧ろ信心は得易いとの御言です。聖教よみは佛法の申し立てたことばないとは、學者では信仰は得られないが、ものの知りでは安心は貰はれないがとの御誡めにて、自信安心の基礎なくば、云何に口角泡を飛して、幾千座の說教を爲すも、決して人に信仰の熱火を移すことは出來ないとの御誡めてある。ア、私自身も、此御一言に接して、我ば果してドーであるかと、顧ることが毎々あります。本日來聽の諸君中にも、若しや徒らに理解力のみをたのみ安心の一端をわきまへて、能事終れりと爲す、所謂ものシリ貌の信

徒があつたならは、宜く此御言によりて慚愧すべし、此に反して次の御言は難有のであらふ、

「尼入道の嬉しやたふとやと申すを見ては人信を取る」

一文不通の老人どもでも、歡喜のこゝろに滿たされて、唯何となく慕はしさのあまり、南無阿彌陀佛〳〵と稱へ喜ぶ姿を見たなら、ドンな鬼でも大蛇でも、念佛の聲に感化され、誹法の角を折り不信の兜を脫いて、自然佛門に歸仰するのである、知らず〳〵帝の則に契ふとはこれであつて、即ち御佛の濟度の事業を、凡夫が行ひつゝあるのです。

諸士よ吾々は永劫の間、罪惡の地獄に墮し、浮むべき時期の無かつたのだが、今は光明界裡に棲み、佛德と攝融する身となり得た

は、彌陀大悲の願力によりて然るところなれば、この廣大なる恩德に對しては、吾人は身を碎き骨を粉にしても感謝せねばならぬ、假令粉骨碎身して報するも、之れを御佛に永劫の間、苦心經營したまいしものに比ふれは、その一分の恩を報するにも足らぬのである、然るに生爪一枚捧げるにも及はぬのみか僅に聲に稱へたる一片の念佛、はく洪大の恩德を報盡するに當たるナウ、勝手のよき御教に一家稱名報恩の宗義であります

第四席　安心門

信仰の對象としての六字名號

「信」と云ふものは、極大切なものである。信用の有無は經濟界の振否に關し、信認の厚薄は、政治界の運命に係りし、信仰の正邪は、宗教界の存亡に差し響くのであります。

西諺にも「信用は無形の財なり」と云ひ、「信認は無數の權力なり」と申して、動不動の財産は大切でも、天災地變に失ふ惧れがあり、爵位や勳章が貴重でも、下れして奪はれぬにも限らない、信認と云ふ權力と、信用と云ふ財産は、剝がれる憂ひもなく、燒かれる心配もありませぬ、世間出世何れの時、何れの場合でも、至極大切なも

のは信てある、殊に。淨土眞宗の如きは、「祖師聖人御相傳一流の肝要はたゞこの信心一つにかきれり」と云ひ、「經釋とも に信を以つて詮要とせらる」と云ふて、淨土教の本領は信でありますから、信仰論なとは、至つて重要な問題に屬するので、輕々しく筆を下すことは避けねはならぬ、此重要な問題に向つて、私は、學問の見地に立つて解釋を試むるだけの勇氣はない。唯自已のへたゞいて居る信仰を告白するに止まるのである。

單に「信仰の對象としての六字名號」と題す。併し對象のみの御話でなく

第一信仰の對象（所信）

第二信念の成立（能信）

を話して見たいと思ふ。矢を射らんとするには須く先つ的を定めねはならぬ如く、信念を引き起すについては、信念の對象から定めねはならぬ。對象とは、眞宗專門の名目で云へは、所信の法體のことで、信せらるゝ、物その物をさして申すのである。この所信の定め方に出つて、自力となり他力となり、迷信妄心となるのであります から最も大切である。近來は、佛教家の間に於て、「迷信呼はり」することが流行出して、一方の東京連が、ヤレ時代智識に契はぬ信仰は迷信だとか、ヤレ不合理の未來主義の宗教は妄心だとかと罵れば一方の西京黨は、ナニ信仰と智識と合せしめやうと云ふが寧ろ迷信だとか、イヤ信仰は情の上に立ち、理論は智の上に立つ、全く見地が違ふとか、曰く何、曰く何、甲論乙駁八釜しいことである、ナル

程眞妄の區別判然せざれば、眞の信仰は鼓吹しかたいところから、加様に八釜しく爲つたことであらふ。正信迷信を判別するは中々一朝の論では盡きないが、併ら何れにしても「信仰に眞妄の分るゝは固と對象の正邪如何に基因す」と云ふことだけは、諸君が許すだろうと思ひます、いの「鰯の頭も信心から」と云ふ諺も、稲荷さまだと云ふて狐の死骸を信じたり、神さんの御告げだと申して腐り水を呑んだり、猫でも杓子でも何でも構はず、信仰すると云ふやうな連中が迷信である、之等は對象が曖昧であるから、之れに由つて惑き起された信念も曖昧の迷信となるのである。之れに反して、對象が正實であつたならば隨て信念も眞正な道理です。そなり正信と妄心とは、信念そのものにおいて區別を爲すよりも、對象の眞妄云何

にあるのでせふ。それであるから求法家の最も注意すべきは、「對象の選定であります。

さてその對象の種類は、一つや二つでありませぬ、他宗教のことは暫く措き。我佛教中のみにあつても、宗派の數が假りに十三宗四十一派ありとすれば、對象の數もそれだけあるの道理です。が若し各宗を概括して聖道淨土の二門と分けるとしたならば矢張り對象も二種に攝めることが出來る。第一自己心内に對象を求むる宗派、これは聖道門の宗派にして、即ち聖道門に於ては、是心是佛是心作佛と云ひ、唯心の彌陀己心の淨土と申して、自己の心己外には何物も認めない、彼の弘法大師が「空海のこゝろの中にさく花は彌陀より外に知るひとびとなき」とよみ。佛心宗の古德が「木できざみ繪にか

く佛は佛でなしまことの佛はこゝろにぞあれ」と詠じて、佛像を爐中に投じて、我が尻を暖めた故事もある如く、自己心内の佛性を觀するが聖道教の信仰です、此等は主觀界裡に屬する對象と稱してよからふ。第二に自己心内に對象を求むる宗派。これは淨土教の信仰にして。淨土教では、その名に示す如く、此世界已前に極樂淨土の實在を認め、自己の心外に阿彌陀佛の人格と、南無阿彌陀佛の救のみ聲とを認め、是れを對象として信念を起すと教ゆ。これを客觀的對象と名けてよからふ、如斯二種に適的するのであります。

對象已に上の如く分るゝから、此れに對する信念成立の模樣も、自然異るので、第一信念の必須要件とゝ云ふべき、人世觀、自我觀からして見地が違つて居る。聖道門の人世觀は、娑婆卽寂光土と觀

するから、人世は樂しきものと認める樂無觀である。淨土門は「厭離穢土欣求淨土」と示して、人世は罪に穢れたるものと云ふ觀念を起す厭世觀である。（厭世と云へは國家の進歩、國民[illegible]武の公敵だと云ふものもあるが、私は厭世だから寧ろ國家を進歩せしめ、國民を興奮せしむと申したい、此話は他日に讓ります）この厭世觀が無けんければ、決して純他力の信仰は起りませぬ。（眞宗僧侶中にも淨土教は厭世に非す樂天なりと主張するものもありますが、これは「進歩の公敵」と云ふ彼の世の攻擊を避けるために、曲けて經典を解したのである、信仰の後の生涯は兎も角、信仰を起すに方り、厭世の觀なくんば他力の趣味は知れぬのである）又自己を認めるも、自然聖道淨土の二教區別されてあつて、聖道門は生佛不二の見地に立つて

「こまてい」自己の能力をたのみ、高尚な氣持で進まねはならず、淨土教は自力無功主義の見地に立つて、全然「我身は惡き徒らもの」と卑蹲していらねはならぬ、一を自力と名け、一を他力と名く、自力他力の分るゝ所以は多く之れに基くのである。

さてその二種の中に於て、何れか勝れ何れが劣ると云ふ、優劣を論評することは、容易の業でないのみならず、又此を爲すの必要もないから、今は淨土門純他力の信仰のみを御話しします。抑も淨土眞宗は、前已に云へる如く自己の心外に、淨土と、彌陀と、名號との實在を認めて、信念を起すのであるが、固とより此三は、依正人法の相違こそあれ、その體不離不別のものたから、その一を信ずれは他はその中に含まれてある。聞其名號の宗義に據つて、且く名號

の一面より云へは、一宗の安心、南無阿彌陀佛を對象として、南無阿彌陀佛の信念を起すの外はない蓮如上人が

彌陀の名を聞き得ることのあるなれは

南無阿彌陀佛とたのめみなひと

と詠したまへるものは、此意を示されたのであつて、「一流安心の體」といふこと南無阿彌陀佛の六字」である。さて、その六字名號を對象とするについて、一宗に示すところ大凡二途あり。一に南無阿彌陀佛は、その意義を信ずへきものと教へ、二に南無阿彌陀佛は、その名を唱ふへきものと示してある、かの蓮如上人が「信心獲得すといふは、第十八の願をこゝろうるなり、この願をこゝろうるといは、南無阿彌陀佛の六字のすかたをこゝろうるなり」と云ひ。又は

「一流安心の體といふこと、南無阿彌陀佛の六字のところ」と教へたまへるものは、第一に屬す。即ち南無の二字はタノム、阿彌陀佛の四字はスクフ。タノムモノヲスクフと云ふが、名號の意義にしてこれが救濟の聲である、我等が、この福音に接觸し、この慈悲のみ心と一致契合する一念をさして、信心と示されたものである。又法然聖人が「往生の業には念佛を本と爲す」と云ひ、我祖師が「念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」とのたまひし如きは、第二に屬す、即ち「念佛往生の願」と云ふ命題に根基し、彌陀の本願は名號を稱ふるものを迎へ取るべしとの御呼聲であると、教へられたのであります。斯の如く信念の對象たる六字名號は、タノムモノをタスケン、稱ふるものを救はんとの御呼聲に外ならぬのであつて。我等

は、此御呼び聲に順應し、佛德に融合するが他力の信仰である。さて云何して順應すべきか、云何に信念を生ずべきか、又云何に南無阿彌陀佛の存在を認むるかと云ふか、次の問題であるところにをいて

第二信念の成立を御話しせねばならぬ、凡そ信仰の起こる源因に三種ありまして、一に推理經驗によつて信ずる。二に直觀によつて信ずる。三に教權の指導によつて信ずる。かの信念の對象に種々あると同しく、信念成立の原因も亦種々あるのです。去り乍ら、該して云へば此三つに過ぎない、第一推理經驗によりて信ずるとは、ニュートンが、林檎の落ちるところから推理して、地球の引力を信した如く、理屈を推し究めて、始めて信ずるのである、世間で、學說を信するなどゝ云ふは多く是れに屬す、我佛教中で云へば、聖道門

の諸宗派は、道理成佛の法と申して、此推理的信仰であります。二に直觀によつて信する、彼の紅の花を見て紅の花と信し、綠の柳を以て綠の柳と信すると同じく、物その物を認めて、直覺するのである、禪宗の直指人心見性成佛の法は、主として之れに傾ひて居る。三に教權によりて信する。卽ち彼の洋行戻りの人の言によりて。ヒラミッドのあるを信じ、歷史書の指導によりて、昔し楠正成のあつたことを信すると同しく、偉人の告知、經典の指導によりて、彌陀の實在を信する、淨土經は之に屬するのである。ザッと分類して見れば已上の如くなれとも、固とより各宗その一面にのみ偏重するのではない、その主とするものを擧けたゞけである。さて我淨土眞宗は、その何れに屬するやと云はゞ、多く直觀的信仰と、教權的信念

を皷吹したまふやうである、彼の善導大師の就人立信說の如き、彼の法然聖人の教相論の如き、みな教權を以て信仰の根底としてある特に我祖師の如きは最も教權に重きを置かれた人で、その適切なる文を擧ぐれば。

「親鸞にをいては、念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおほせをかふりて、信する外に別の子細なきなり」と云ひ。

又、

「念佛はまことに淨土に參るたねにてやはんべるらん、又地獄におつべき、業にてやはんべるらん、總して以て存知せざるなり、たとひ法然聖人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」と云ひ。又、

「されはわれとして淨土へまいるべしとも、又地獄へゆくへしとも
さだむへからず、故聖人のおほせに、源空があらんところへゆか
んとおもはるべしとたしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄
なりとも故聖人のわたらせたまへるところへまいるへしとをもう
なり」、又
善知識にすかされたてまつりて、惡道へゆくはひとり行くへからず、師とともにをつべし、されば地獄なりと云ふとも、故聖人のわたらせたまふところへまいらんとをもいがためたれば、善惡の生所わたくしのさだむるところにあらず」、
ナンと諸君、我祖師は非常なる教權の服從者ではありませぬか、早く云へば、理論上からは地獄極樂も、あるやら、ないやら決して知

れぬ、學問上からは、人格の彌陀も實在する哉否や解らぬ、知れぬと云ふが眞理である、その知れぬところにをいて、偉人の告知上より極樂や彌陀はあるに違ひないと信したと仰せらるゝ、之れが我祖の信仰の告白である、更に又之れを示して
「彌陀の本願まことにおわしまさば、釋尊の說教虛言あるへからず
佛教まことにをはしまさは、善導の御釋虛言したまふべからず、
善導の御釋虛言なくんば、親鸞か申す旨亦全くむなしかるへからず
さふらふ、愚身が信心におきてもかくの如し、此上は念佛を取つて信せんとも亦捨てたてまつらんとも面々の御はからいなり」
との玉ひしは、一層深刻な趣味がありまず、我祖師已に斯の如し、我々も祖師の信仰の過程をたどり、この通り、信仰して進まふでは

ありませぬか、我祖の信仰を信したのが、それが直ちに法然聖人の教へを信したことゝなる、法然聖人の教へを信したのが、即ち善導を信したことゝなり、善導を信したが釋迦となり、釋迦を信したが彌陀の御聲を信したことゝなるとの御教であります

然るに近來、或一部の人達の中に、教權的妄從は迷信であると申して、我祖師の御語は無論、釋尊の說まてに疑を挑んで、云爲する人が出來ました、それも門外漢なれは兎も角、佛教僧侶であり乍ら、往々加樣のことを申すに至つては實に憐むへきである、此頃は懷疑論と云ふ學問が出來た爲めか、ヤタラに物を疑ふことが流行する、僅に五百年前の兒島高德や、楠正成さへ、ないものだと云ふ程の世の中となりた、コー云ふ連中が佛說を疑ふことは致し方もないが、

坊主であり乍ら大乘は非佛說だと、地獄極樂は詩的形容に止まるなとゝ云ふは、言語道斷である、全體、佛說を信せないのなら、決して佛教徒ではありませぬ。佛教とは「釋迦佛の教」であるから釋迦佛の說だけは何であらふとも信せねはならぬ。否佛教徒だから信ずる義務があると云ふのではなく、佛說を信するから、佛教徒であることを忘れてはならぬ、教權に服從して經說を眞受にするのが何で妄信であるか、見よ太陽は世界たと云ふことや、地球の圓いと云ふことは、誰も疑ふものはないが、自分が實見して來たのではあるまい、學者の學理上より發見した理を信する、之をしも妄信と云ふか、我々は世の哲學者己上の見地に立て、所有世の中の偉人傑士が最も敬服する釋迦の發見した眞理を、その經說によつて信す、何

が故に妄信である、我已上の人が服從して居る經說なれば、我々も教權に服從して耻がしくないではないか

支那の韓退之と云へば、佛骨の表まで書いて、佛を罵つた排佛家だが、かの大顛禪師に遇ふて、佛說を難じたとき、大顛が「韓退之汝は昔の佛圖澄と云ふ人を知るかと尋ねられましたから、韓退之「イカニモ知て居る」と答へた。ソコデ又禪師が「爾らは汝と佛圖澄とは智德の點にをいて何れか勝ると思ふ哉」と、退之答へて「我れ佛圖澄に及ばず」と云ふたから「禪師すかさず、汝に勝る人にして已に佛を信ず、その德に及ばざるの汝が、佛を罵るは何ぞや」と詰問したとあります。我々が僅かに學び得たる哲學上の智識を以て、釋迦佛の經說を疑ふは、彼の韓退之と同もく、恰も蚊虻の足を以て

富士山を碎き潰さんとすると一班である。要するに我等の信仰は別に奥深ひ道理を究めて求むるのでない、教權に服從して南無阿彌陀佛を直覺するのである、直覺すると云へばとて、佛心宗に所謂、頓悟頓入の意味でなく、南無阿彌陀佛の活動によりて南無阿彌陀佛を信ずる、彼の月の光によりて月を認めると同しく、御佛の慈悲の光りによりて佛を直覺するのである。是れを示して蓮如上人「信心とはまことのこゝろとよめるなり、まことのこゝろと云ふは行者のわろき自力のこゝろにてはたすからず、如來の他力のよきこゝろにてたすかるかゆへに、まことのこゝろとは申なり」、又「信するこゝろも念するこゝろも彌陀如來の御方便よりおこさしむるものなりとしるべし」と仰せられたはこの意にして淨土教の信仰は純他力にある

ことを知らしめたまふ

巳上

附告

「安心門」に關する六字名號については論究すべき意義多々ありて予は嘗て十個の論目を設けて通俗講話を試みたり

一第十七願より眺めたる六字名號　二第十八願より眺めたる六字名號

三第十九願より眺めたる六字名號　四聖衆靈の眼に映じたる六字名號

五聖衆導の眼に映したる六字名號　六機法一體としての六字名號

七願行具足としての六字名號　八佛凡一體としての六字名號

九真行圓滿の六字名號　十覺證に離れざる六字名號

這は更に稿を草して梓に上さんとす諸士幸に他日の續編に待て

明治三十六年三月廿五日印刷
明治三十六年四月一日發行

不許複製

著作者　野田憲雄

發行兼印刷者　京都市下京區中珠數屋町烏丸東入二十人講町二十二番戸　西村七兵衛

發行所　京都市東六條　法藏館

發賣所　京都市西六條　文洋堂

赤松一男師著
新案説教

慈悲之父母

全一冊　定價參拾錢　郵税四錢

表紙石版
美本

時世遷れの説教に厭けるものは本書を讀め。社會の文化一新せる時、説教ばかり徒に舊式を守れるは愚かならずや。著者此に憂ふるあり、嶄新なる意匠を凝らし、工夫に工夫を累ねて、遂に本書を公にす、先つ題を「釋迦彌陀は慈悲の父母」の和讀に取り、宗意安心の骨髓たる要門弘願の説意を明にするに、經釋に據り、御文を引き、流麗の辨懸河の如く、縱横自在に一首を説き破れり。殊に二尊の大悲を父母に喩ふるに就て、之を信前に、一念の場合に、信後相續及び得生の場合に約して、最も詳密を極め、新譬喩を挾み。時代に適する因緣を擧げ、一言一句信者の腹をえぐり、叮嚀親切、洋ゆき所に手の屆く感あり。是れ實に布教に取つて、清新便益ある參考書たるのみならず、眞宗信者が座右求道の友たるべし。

發行所　京都市東六條　法藏館

大谷派御連枝顯學
顯學牧野神爽師述

眞宗法話集

神爽

第二版

表紙石版　口繪コロタイプ寫眞版二葉入
全一冊　定價金五拾錢　郵税金六錢

本書は眞宗の大布教師として、最も世に其名を知られたる牧野神爽師が、或は東に或は西に、或は上流の人士の爲に、或は僻邑の翁媼の爲に、或は婦人會に、或は軍隊に、或は監獄に、或は青年會に、或は釋老と言はず、智と言はず、或は愚と言はず、老と言はず幼と言はず、崇高なる信念と縱横の雄辯とを以て、夙に佛陀の救濟を宣傳し、夜に大悲の光明を掲げ、既往數十年間に漏されたる妙聲は、一切蒐集せられて餘蘊なし、されば其材料の豐富なることは言はずもがな、一度本書を繙かん者は、立所に心靈の飢渴を癒すべし、若し夫れ教家諸師の一度閲する事あらんか、自己の信念に資する所あるのみならず、他日布教傳導の最好伴侶たるべきなり、庶幾くは大方の諸彦是非共一本を購ふて備へられよ

發行所　京都市東六條　法藏館

河崎顯了師述
●蓮如上人

御一代聞書説教

全一冊　定價貳拾五錢　郵税四錢

口繪慈燈大師山科御廟コロタイプ版

本書の内容は、蓮如上人の信念の精華とも稱すべき御一代記聞書の中、殊に時事に痛切なる條々につき、著者が得意の長廣舌を振ひ、一々之を青年會、婦人會若しくは、學生諸氏に對して講演したるものなれば、其如何に修養の好範たるべきが、布教家の好材料たる可きは、本館の説明を要せざるなり、幸に江湖諸彦の精讀あらんことを切望す。

南軒富井隆信師著
新刊●正信偈講話

他力のをしへ

全一冊　定價參拾錢　郵税四錢

本書は富井隆信師が、是等の人達に容易く眞宗の教義を解らせる爲め、正信偈に就いて講話せられたものて、先つ阿彌陀如來の本願の成就から、釋尊説教の本意を叙べ、三國七高僧の御教化を逐一に擧けて、眞宗の肝要、念佛の奥義、之を讀めは一目瞭然と解る。加之、師が得意たる輕妙流麗の筆を揮ひ坐して物語るが如く、新因緣をも雜へ、譬喩をも加へ、誰れでも有難く面白く讀まれる樣に、最も平易に書かれたれは、眞宗の信徒たるものは、必す之を一讀して親鸞上人の精神を知つて下さい。

公爵近衛忠熙公題辭
文學博士南條文雄師
遠船小栗栖香頂閲

小栗憲一著

●眞宗興隆緣起 第二版全一冊 美本
定價四拾錢 郵税六錢

伯爵 副島種臣題辭 遠船小栗栖香頂閲
權大僧正大谷勝縁序 學師小栗憲一著

●眞宗教旨 半紙本 三號活字 全一冊
定價參拾錢 郵税四錢

御眞筆經文書翰入
執綱 大谷勝縁師題辭
文學博士南條文雄師題辭

●親鸞上人 美製菊判 全一冊
定價四拾錢 郵税六錢

井了雄輯

新御門跡題辭 鈴木信雄蒐集

●大谷寺誌 大本全一冊 美濃紙和裝
定價八拾錢 郵税八錢

文學士 加藤玄智君著
●宗教之將來 定價四拾錢 郵税六錢
龍造君著

●宗教管見 定價貳拾錢 郵税貳錢
龍造君著

●佛教信者のよろこひ 定價拾錢 郵税貳錢
龍造君著

●佛說阿彌陀經送意 定價卅五錢 郵税四錢
龍造君著

●人生問題 定價貳拾錢 郵税貳錢
院烏敏著

●宗教清話 定價拾五錢 郵税貳錢
院烏敏著

●心靈夜話 定價貳拾錢 郵税四錢

文學士 德永滿之君著
●宗教哲學骸骨 定價拾貳錢 郵税貳錢

清澤先生 藤岡翁
●養病對話 定價貳拾錢 郵税貳錢

赤松二男師著
●佛教行事十二月 定價貳拾錢 郵税貳錢

公爵近衛忠禮公題辭
文學博士南條文雄師
蓮船小栗栖香頂閲
小栗憲一著

眞宗興隆緣起 第一版全一冊
美本 定價四拾錢 郵税六錢

伯爵 副島種臣題辭 蓮船小栗栖香頂閲
權大僧正大谷勝信序 師小栗憲一著

眞宗教義 上中下三冊 紙本全一冊 活字
美製 定價參拾錢 郵税四錢

御眞宗綱要 大谷勝信著 福井了雄輯
神道綱要 大谷勝信著 福井了雄輯
文學博士 井上文雄師題辭

祝鶴上人 美製菊判 全一冊
定價四拾錢 郵税六錢

新師門跡題辭 鈴木白雄謹撰

大谷寺志 大本全一冊 美濃紙和裝
定價八拾錢 郵税八錢

文學士 加藤玄智君著
宗教之將來 定價拾錢 郵税六錢

龍造寺著
宗教管見 定價貳拾錢 郵税貳錢

龍造寺著
佛教信者のよろこび 定價拾錢 郵税貳錢

龍造寺著
佛說阿彌陀經講話 定價貳拾錢 郵税四錢

龍造寺著
人生問題 定價貳拾錢 郵税貳錢

曉烏敏著
宗教講話 定價拾五錢 郵税貳錢

曉烏敏著
心靈夜話 定價貳拾錢 郵税貳錢

文學士 德永滿之君著
宗教哲學骸骨 定價拾貳錢 郵税貳錢

高澤先生 岡田男師著
養病對話 定價貳拾錢 郵税貳錢

文學士 男師著
佛教行事十二月 定價貳拾錢 郵税貳錢

通信示談は本誌の

有教家の一大機關

法藏

毎月一回一日發行

定價一部五錢 半年分卅錢 一年分五拾錢（郵税不用）

説教演説の師友

總會所は示談にあり

信仰を求むる人は早く「法藏」を御覽なさい

活けるこの欄をよめは吉谷講師初め知名の學者の難有き法話が家にすわつて〻聞かれます。

法藏では御安心に不審のある方か命がけて尋ます示談のを今井師が一々親切に答へられます。

修養は眞宗の青年が如何に世に活動すへきかの活きた心懸の修養に就て有益の機關です。

家庭では淸き佛の光ある家庭を說きて面白い樂しい婦人子供の讀物をのせます。

美譚には世のめでたき信者の傳や古今の感心ある事蹟を紹介して讀者の手鏡とします。

雜錄には種々の心得、世間の出來事あゝ何でも有益ある記事をとりあつめます。

光明に住む人は常に「法藏」をお讀なさい

●●お待ちかねの新雑誌●●

法の寶

年玉法事の好贈品！

○○讀めよ讀めよ功德あふれ好雜誌を、月に必ず一度は○○

間接布教の大覇王！

○心靈の貧しき人達に、佛のみ藏を開けて、功德を施すたゝとひ雜誌ですへで、その主意は通佛教の信仰を弘めるのにあつて、老幼男女、誰でも讀めます。早く讀んで、自分が澤山の寶持とあつたら、

佛教道德の大義　菅公信佛談
因果の理法活きた佛
十大魔王靈魂問答
佛教衛生談　人の行く道
堪忍の修養　青年と念佛
家庭と宗教　年頭歡話
佛教の社會主義　人の宗教心

表紙石版製本美麗
定價一部壹錢○郵稅五厘の割○但八冊迄郵稅貳錢八冊毎に貳錢增す○一年分拾八錢（郵稅共）

廣く天下にも慕ひ寄せて下さい、世間には心の貧しい人達が多いから、之七法事や年玉に施本して下さると、間接の大布教にあります

○○施せや施せや佛のあくめる法の寶を、人に必ず一部は○○

發行所　京都市東六條　法藏館

布教眞寶

著者

		正價	郵稅
第一編	法藏館●名家談叢	十五錢	四錢
第二編	法藏館●大家論叢	十五錢	四錢
第三編	法藏館●佛教通俗	十五錢	二錢
第四編	青田節	十五錢	二錢
第五編	青田節	十錢	二錢
第六編	法藏館●佛教倫理	十五錢	四錢
第七編	法藏館	十五錢	四錢
第八編	間野闡門	十五錢	四錢
第九編	舟橋水哉	三十錢	四錢
第十編	小林智圓	二十錢	四錢
第十一編	田淵靜淵●監獄教誨	廿五錢	四錢
第十二編	田島大機	十二錢	二錢

排邪と佛教
基督教と佛教
大家演說
國家と宗教との關係
櫻花の精神
德之源
無常世界
今世紀に於ける說教演說
教海の新光明
十世紀傳道演說
佛教と國家
惠露

眞宗法話全書

第一篇　溫美契華　●歸命字訓勸誘錄　前續編　正價八錢郵稅貳錢
第二篇　溫美契華　●三誓偈宣唱錄　前編　正價八錢郵稅貳錢
第三篇　溫美契華　●三誓偈宣唱錄　後編　正價八錢郵稅貳錢
第四篇　淨瀑寺　●改悔文法話　全　正價八錢郵稅貳錢
第五篇　香月院　●白骨御文法話　全　正價八錢郵稅貳錢
第六篇　香月院　●三首詠歌御文法話　前編　正價八錢郵稅貳錢
第七篇　香月院　●三首詠歌御文法話　續編　正價八錢郵稅貳錢
第八篇　香月院　●獵漁御文法話　前編　正價八錢郵稅貳錢
第九篇　香月院　●獵漁御文法話　續編　正價八錢郵稅貳錢
第十篇　大玄　●帖外和讚勸誘錄　卷上　正價八錢郵稅貳錢
第十一篇　大玄　●帖外和讚勸誘錄　卷中　正價八錢郵稅貳錢
第十二篇　大玄　●帖外和讚勸誘錄　卷下　正價八錢郵稅貳錢
第十三篇　大行寺玄　●大原問答勸導　全　正價八錢郵稅貳錢
第十四篇　大玄　●願願勸誘錄　卷上　正價八錢郵稅貳錢
第十五篇　同　●願願勸誘錄　卷中　正價八錢郵稅貳錢
第十六篇　同　●願願勸誘錄　卷下　正價八錢郵稅貳錢
第十七篇　遠山至岸　●善導和讚勸誘錄　前編　正價八錢郵稅貳錢
第十八篇　同　●善導和讚勸誘錄　續編　正價八錢郵稅貳錢
第十九篇　吉田智淵　●改悔文說教　全　正價八錢郵稅貳錢

●安心道のしらべ百ケ條　附錄　信後心得十二ヶ條　蜀講吉谷覺壽師校閱　雞師細川千巖師遺稿　定價十五錢　郵稅二錢

●たすけ玉への總括　華名信慶師著　定價十錢　郵稅二錢

●たすけ玉への總括を讀む　東陽圓月師著　定價八錢　郵稅二錢

●たすけ玉への明細考　五十嵐深慧師著　定價八錢　郵稅二錢

●たすけ玉への斷案　龍華空音師著　定價十錢　郵稅二錢

●二氏對評たすけ玉への斷案　東陽圓月師著　元價十錢　郵稅四錢

●二諦の精神　（心識亂史）　順清求法戰錄　定價二十錢　郵稅四錢

●宗安心ふくろ　妙香尼公題歌　定價六錢　郵稅二錢

●宗安心手鏡　義成老師遺稿　定價十錢　郵稅二錢

●二河譬勸導辨　敎覺寺和上說　定價十錢　郵稅二錢

●法の鑿（一名法義家內示談）　定價十五錢　郵稅四錢

●我等が安心　藤井義住師著　定價五錢　郵稅二錢

●玉日宮御小傳　土屋智重師著　定價六錢　郵稅二錢

●鹿谷因緣談　野田憲雄著　定價十錢　郵稅二錢

●教如上人　鐵鶯子著　定價十錢　郵稅二錢

●大谷派法主實記　江村秀山師著　定價十五錢　郵稅二錢

●東本願寺獨立史　荻野外史著　定價八錢　郵稅一錢

●末の光明　石原素兮著　定價八錢　郵稅二錢

●說教　文學齋述　●自在一口辨　定價八錢　郵稅二錢

法話無盡藏

自第一編 贈師 長生院知現說 ●正信偈說教 全三冊 正價八拾錢 郵稅拾貳錢
至第三編 福口圓光寺大悟說 ●蓮如上人御一代記 法話 全一冊 正價廿五錢 郵稅四錢
第四編 ●一枚起請文法話 全二冊 正價四拾錢 郵稅六錢
第五編 贈師長生院知現說 ●出家發心御文法話 全一冊 正價貳拾錢 郵稅貳錢
第六編 贈師易行院法海說 ●三經和讚說教 全二冊 正價四拾錢 郵稅六錢
第七編 贈師長生院知現說 ●改悔文說教錄 全一冊 正價廿五錢 郵稅四錢

發行 贈師香雲院澄玄說 ●傳繪指授活用辨 全一冊 正價拾五錢 郵稅貳錢
布教使樣雲說 ●大經五惡段講演 全一冊 正價拾五錢 郵稅貳錢
布教使光弘 貼言說 ●眞宗諸機指導辨 全一冊 正價拾錢 郵稅貳錢
黑田曇勝說 ●監獄教誨手引 全一冊 正價五錢 郵稅貳錢
布教使瀧味 貼成說

說教學全書

逐編發行

第一篇 (縮刷) 通俗元亨釋書和解 全一冊 正價金六拾五錢 郵稅金拾貳錢
第二篇 (同) 三國合類說法大因緣集 第二版 全一冊 正價金五拾錢 郵稅金八錢
第三篇 鈴木慶載編纂 法味愛樂談 全一冊 正價金四拾錢 郵稅金四錢
第四篇 (縮刷) 一雷嗽因緣 通俗礦石集 全一冊 正價金六錢 郵稅金四錢
第五篇 慈雲尊者示衆 王法正論治國之要 十善法語 第三版 全一冊 元價金拾錢 郵稅金四錢
第六篇 鈴木慶載編纂 法味愛樂談 第二編 全一冊 正價金貳拾五錢 郵稅金四錢
第七篇 大行寺信曉述 三帖和讚講話 全三冊 正價金六拾錢 郵稅金拾錢
第八篇 大行寺師述 無住禪說教演說 沙石集 第四版 全一冊 元價金拾貳錢 郵稅金六錢
第九篇 大行寺信曉述 正信偈談話 全一冊 正價金拾五錢 郵稅金拾錢
第十篇 大行寺信曉述 四十八願講話 全一冊 正價金拾五錢 郵稅金四錢
第十一篇 大行寺信曉述 御文講話 全五冊 正價金六拾貳錢 郵稅金拾貳錢

家庭社同人合著
●佛教の家庭　定價三十錢　郵稅四錢
石河仲將君著
●婦人手引草　本多澄雲師著　減價廿錢　郵稅四錢
●眞美人　定價八錢　郵稅貳錢
本多澄雲師著
●婦女の友　藤蹈大家說　減價十錢　郵稅四錢
●幸福なる家庭　定價八錢　郵稅貳錢
本多澄雲師著
●眞の人　家庭社同人合著　減價三十錢　郵稅六錢
●家庭讀本　母の恩　定價廿五錢　郵稅四錢
藤岡了空翁著
●家庭讀本　感恩小話　定價廿五錢　郵稅四錢
舟橋水哉君著
●偉人源信　定價十五錢　郵稅四錢
藤岡了空翁著
●女一人往生手鏡　定價廿五錢　郵稅四錢
出田采圓君著
●聖蓮如　定價十五錢　郵稅四錢
藤岡了空翁著
●通俗法話　心のなぐさめ　定價十錢　郵稅二錢
木村半休居士著
●中將姫の傳　定價十錢　郵稅二錢
多田公峻君著
●實踐人躬行道　第二版　定價十錢　郵稅二錢
大須賀秋峯君著
●菅公奉佛傳　定價二十錢　郵稅四錢
石原宜賢撰
●佛教少年讀本　第二版　定價十二錢　郵稅二錢
鐵鷲著
●健全なる青年　定價十錢　郵稅二錢
本多澄雲、田淵證緣師合著
●悔悟の花　定價廿五錢　郵稅四錢

青年布教 六字名號

野田憲雄

国立国会図書館

019304-000-3

特47-976

六字名号

野田　憲雄／著

M36. 4

ABF-2946